

平成 31 年度入学試験問題（推薦入試 I）

# 小 論 文

（初等教育教員養成課程）

## 注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること

〔1〕 つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「時速 12 km の自転車で 30 分走ると何 km 進むかな」という問題が、その時間の初めの一步だった。言葉を添えてイメージをもたせると、どの子どもも 6 km とノートに書いた。(1) 美香は式まで書いた。でも、何か浮かぬ顔だ。 $12 \times 0.3 = 6$  と書いて首を傾げている。普段から表情豊かな子どもで、思ったこと感じたことは屈託なく言葉に出せる子どもだ。このときも「変だ、変だ」とつぶやいていた。

私には、美香の「変だ」の意味がわかっていた。だから、彼女を目の端に置きながら、他の子どもたちに「その答えが出てきたわけを式に書いてみよう」と指示した。みんな、それぞれに式を書いた(図 1)。その中に美香と同じ  $12 \times 0.3$  が数人いた。誰もがひとまず自分の立場をもった。そこで私が切り出した。

- |                          |
|--------------------------|
| ・ $12 \div 60 \times 30$ |
| ・ $12 \div 6 \times 3$   |
| ・ $12 \div 2$            |
| ・ $12 \times 0.5$        |
| ・ $12 \times 0.3$        |

図 1

「さっきから、美香が『変だ、変だ』と言ってるけど、何が変なのだろうね。美香に聞いてみようか。美香、言ってごらん」

美香は、黒板に自分の式を書いて話し始めた。

「私は  $12 \times 0.3$  という式を書いたんだけど、これだと答えは 3.6 km になる。6 km にならない」

この話は二十数年前のことである。さすがに細かいことは覚えていない。記録を見ながら、微かだが懐かしい残像を追いかけている。でも、このときの彼女の不思議そうな表情は昨日のように甦ってくる。

美香の式は間違っている。しかし、私は「いいなあ」と思う。本当にいいなあと思う。自分の力でとにかく最初の一歩を歩いている、そのことが何よりいい。間違っているとか、正しいとかは、この場面では問題にはならない。いや、ここでは間違いがむしろいい。間違ったからこそ、子どもたちの問いが深まる。

「1m が 120 円のリボン 50 cm の値段はいくらか」というとき、 $120 \times 0.5$  と書いた。その過去に手に入れたものを新しい場面で素直に使っている。そして、自分が正しいと考えている結果にならないことに首を傾げている。

当時のメモには、ここで他の子どもの一人が発表している。

「もし、美香の式の  $12 \times 0.3$  でいいとしたら、走った時間が 60 分のとき、 $12 \times 0.6$

になる。60分は1時間だから、本当は $12 \times 1$ になるはずなのに」

この発表をきっかけにして、30分が0.3時間ではなく、0.5時間であることが、子どもたちの中で認められていく。その次に発した美香の問いが、またよかった。

「30分が0.5時間だから、 $12 \times 0.3$ じゃなくて、 $12 \times 0.5$ だということはよくわかったけど、では、40分のときはどうするの」

間違っただけを契機にして、美香の中でどんどん問いが発展していく。その問いを学級全体で共有することにより授業が展開していく。

当時、私は、教室の前面に「まちがい大歓迎」と大きく書いた紙を貼ってあった。「間違え」から「正しい」ことを求めようとする。わからないから、わかりたいと思う。それが、学ぶということの本来の姿だと考えていた。間違えることは恥ずかしいことだ、悪いことだという空気が少しでも流れている教室では、子どもたちの学ぶ姿はないと頑なに思い続けていた。その思いは今も変わっていない。

一人の子どもが発表すると「いいです」と他の子どもたちがそろって声を出す授業によく出会う。私は、あの習慣を子どもたちにつけることは絶対にしない。いつも自分のやってみたことが正しいかどうかだけで、先生と友達から見られている。そんな教室で学ぶとき、厳しくて楽しい姿が成立するはずがないからである。大きな声で「いいです」と叫ぶ、その声の下で潰<sup>つぶ</sup>されていく子どもの声があるかもしれない。「私の式は、みんなと違っている。どうしてだろう」と疑問に思う子どもの声こそ、いちばん大切にされなければならないはずなのに、そんな繊細さを押し流してしまうのが、あの「いいです」というかけ声である。

卒業して、もうおとなになった彼女に会った。そのとき、「美香、時速12kmで30分走ったら……」とからかってみた。すると「かける0.3じゃないって言いたいでしょ。わかっているわよ、それくらい。もう、執念深いんだから」と笑っていた。やっぱり、あの授業の一コマを彼女も覚えていたのだ。

出典：正木孝昌（2007）『受動から能動へ ―算数科二段階授業をもとめて―』、東洋館出版社。pp. 352-354（設問の都合により本文の一部を改変している。）

(問1) 下線部(1)「美香は式まで書いた。でも、何か浮かぬ顔だ。12×0.3=6と書いて首を傾げている。」とあるように、美香は問題の答えを求める式としては適切でない式を書いて首を傾げている。あなたはこの美香の行動について、望ましいと考えるか、望ましくないと考えるか、自身の考えを400字以内で説明しなさい。

(問2) 筆者は、この文章を通して間違いから学ぶことの大切さを説いている。あなた自身が間違いを通して学んだ体験を例に挙げ、間違いから学ぶことの大切さを子どもたちにどのように伝えるかについて400字以内で説明しなさい。

平成 31 年度入学試験問題（推薦入試Ⅱ）

# 小 論 文

（初等教育教員養成課程）

## 注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること

〔 1 〕 つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

社会科学とか、さらには学問といったようなこととはまだ直接には縁のない、しかしだんだん話してゆきますように、われわれ一人一人のなかでの社会科学的認識の芽ばえという点では決定的ともいうべき重要な意味をもつ、ありふれた日常語を例にとって、言葉がどう変わってくるか、その背後にある問題を考えてみましょう。

たびたび使いましたので、ちょっと気がひけるのですけれども、例の、「勝つことではなくて参加することが重要だ」という、オリンピックで有名になった言葉がありますね。その「参加」という言葉を例にとってみます。私は、Not to win, but to take part という言葉が電光板に写ったときハッと思いました。「参加する」というのは「テイク・パート」の訳語なんだなど。

「テイク・パート」、あるいは「テイク・パート・イン」というのは、ある特定の人が、ある特定の部署を責任をもって果たすという意味で、それならばオリンピック用語は学界でもけっこう通用する。通用するどころか相当痛い言葉として響いてくるはずです。学問の世界でも誰が勝ったとか負けたとか、負かしてやったとしたり顔をするんじゃないくて、研究者の一人一人が真理の探究といえますか、そこまで深いことをいわなくても事実を解明してゆくという共同の仕事に、それぞれ責任をもって特定の部署を担当する形で参加するのが、本来の姿であるからです。

( 中略 )

「参加」(=分担)というのは、一人一人の決断と行為と責任を背景にもったきびしい言葉です。それは、同じ言葉を使ったパーティシペーションという用語例を見ればわかります。

ところが「参加する」という日本語は別の響きといえますか、倍音構造をもっておりまして、その共鳴板にかかると、このオリンピック用語も、ともかく顔を出しておけばいいんだろう、なにしろ参加することが大切だからという、はなはだ無責任な言葉に化けます。そういう無責任な参加派とさっきみたような勝負派がコンビになっているということは、いたるところで見られる事実です。事実また、そういう無責任な参加がけっこう意味をもっていまして、やたらに宴会に参加したり、飲み屋に参加したり、そのプロローグかエピローグみたいな形で公式の会議にも参加する。こういう

付き合い的な参加をせずに、ある部署を責任をもって果たすという機能的な意味での参加だけをしますと、はじきとばされちゃう。テイク・パートしようにも、「パート」そのものを取られちゃうことすらあります。

言葉は、翻訳されると、本来もっている意味と違う意味で受け取られる。誤訳じゃないんだが誤読しやすい場合が非常に多い。ということは、本を読む場合つねに注意していただきたいと思うことの一つです。

実は、これは言葉だけの問題じゃないんです。「参加」という鋭い言葉が正反対の無責任な言葉に化けちゃう、という言葉の世界での現象の背後には、日本の社会の特質、社会への個々人のかかわり方（＝分担の仕方）の問題があります。個人が集団に埋もれちゃう、ということですね。集団を丸がかえにしたエライ人になるか、集団に埋もれるか、いずれにしても自覚した個々人が、共同の行為で共通の目的をもった集団を形成することが少ない。それこそは集団を構成する一人一人の人間に社会科学を何か他人ごとめいたものにし、社会科学を浮き上らせているもの一つなのでありまして、こういう日本的参加に埋まっているかぎり、絶対に社会科学は自分のものにはならない。会議なんかでも「賛成異議なし」というようなことでは、結論を出すに必要な厄介な作業や知識の収集は他人ごとでしかありませんね。しかし、一人一人が責任をもって問題を立て結論を出すという共同の作業に参加することになると、事実を、断片的に流れてくる情報をもとにして正確に捉えることが自分の問題となりましょう。

出典：内田義彦著『社会認識の歩み』、岩波新書、1971年、pp. 17-19（設問の都合により本文の一部を改変している。）

（問1）上記の文章を読んで、「一人一人の『参加』」という言葉の望ましい解釈とよくない解釈について、60字以上80字以内で答えなさい。

（問2）あなたは近い将来、教師になります。学校に赴任し、子どもたちの前で指導・助言をすることになります。学校では、子どもたちにとっては授業はもとより、学級会活動、学校行事（運動会、学芸会、校外学習）、課外活動、あるいは放課後の清掃活動など多くの行事への参加機会があるでしょう。子どもたちの学

校生活を思い描き、学校の内外での子どもたちの学習活動や行事への参加をめぐって、子どもたちがどのような姿勢や態度で参加したらよいと思いますか、300字以上400字以内で答えなさい。(必ずしも、授業、学校行事、課外活動など、これらのすべてを取り上げて答える必要はありません。)